

研修名 乳児保育・教育 幼児教育・保育

平成 30 年 11 月 12 日 (月) 14:00~16:30

講演 「発達とそのメカニズム (乳児・幼児)」

講師 東京大学大学院 遠藤 利彦 氏



1 講演要旨

1) 自己と社会性の力 = 「非認知」

- ・「自己」に関わる心の性質 (→個性化) : 自分を大切にし、自分を高めていく力。
- ・「社会性」に関わる心の性質 (→社会化) : 集団の中に溶け込み、人との関係を作り維持していくための力。
- ・両側面に関わる「感情の制御・調節」

2) 子どもの発達と教育をめぐる世界的動向

①見直されつつある「乳児期」の重要性と「非認知」の大切さ

- ・well-being (幸せだと感じる) に至る基礎工事 + 「認知」「学力」も「非認知」の支えがあってこそ確実に伸長する。
- ・「非認知」の中核 → 自己と社会性の心の力
- ・それを育む揺りかごとしてのアタッチメント

②『幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿』

1. 健康な心と体
 2. 自立心
 3. 協同性
 4. 道徳性・規範意識の芽生え
 5. 社会生活との関わり
 6. 思考力の芽生え
 7. 自然との関わり・生命尊重
 8. 数量や図形、文字などへの関心・感覚
 9. 言葉による伝え合い
 10. 豊かな感性と表現
- 主体的で対話的な深い学び—
- ・6と8は認知、それ以外は非認知になる。

3) 赤ちゃん学

①乳児のちからの主たるもの = 相互作用するちから、相互作用に引き込むちから、子は相互作用の中で育つ

- ・ヒトの子どもの特殊性 (1) 乳幼児期はきわめて未熟なのに重い
(2) 養育者への依存期間が長い
- ・養育者負担の増大・長期化 → 多くの人達が手をたずさえて子育てしていく。
(父親・おばあさん・隣り近所など)
- ・保育所は子育て支援の中心になり、協力して体制を整える。

②赤ちゃん観の移り変わり (約50年間)

無力 → 有能

受動的 → 能動的 → 「赤ちゃん学革命」 気質研究始まる。

無個性 → 個性的

- ・一人ひとりが生まれつき個性的 → 「気質」

- ・ 9つの気質的特徴：1. 活動性 2. 規則性 3. 接近・回避 4. 順応性
5. 反応の強さ 6. 反応の敏感さ 7. 機嫌
8. 気の紛れやすさ 9. 注意の幅と持続性
- ・ 気質から見る4つのタイプ：扱いやすい子・扱いにくい子・出だしの遅い子・平均的な子
- ・ 発達のカギは気質と環境の「適合性の良さ」なので、子どもの個性を見極めの柔軟に関わり応じる。

③赤ちゃんの「もの」の理解

- ・ 視界以外は胎児期から既に発達
- ・ 生まれてすぐにももの世界を理解

④赤ちゃんの「ひと」の理解

- ・ とにかく「ひと」が大好き（顔・声・動き・においなど）
- ・ 感応する子ども：社会的知覚、社会的共振
- ・ 感応させる子ども：幼児図式、社会的注視（見つめられる）、社会的発信（情を寄せられる）、社会的共振（応答される）
- ・ 感応する/させる子ども→養育者の「錯覚」を誘発する
- ・ 大人にもついそれに応じてしまう仕組み＝マインド・マインデッドネス（心を気遣う傾向）、直感的育児の仕組み
→赤ちゃんを見ると赤ちゃんの気持ちを気遣ったり、気持ちを考えたり、気持ちを読み取ってしまうのは、適切な刺激を与えられている。

2 感想

乳児期からの「アタッチメント」がとても大切で、大人になっても影響を及ぼすことがわかり、「非認知」の支えがあってこそ、成長できることを改めて学ぶことができました。

『幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿』は、小学校へ行く為の準備ではなく、乳幼児期だからこそ大切にしていきたい・育って欲しい姿だということ意識する、というお話が心に残りました。乳幼児期のこの大切な時期を逃さないよう、自尊心・自己肯定感が高まるように保育していきたいと思いました。

心が成長できるよう、一人ひとりの子どもの思いを受け止め、安心して過ごせる園作りに努めていきたいと思えます。研修に参加させて頂き、ありがとうございました。

(記録 久御山町立とうずみこども園 増田久美子)

